C-25

雲り

264
365

特49
122

曇り

宮瀬光果
上甲坪谷

明治
43.10.1
内交

○

私は百性の子であつた、そして明るい町の生活がして見たかつた、いまは、もうその生活の苦しさに疲れてゐながら、何かしら、私の魂は明るさに行かうとし、また暗さに沈まうとする、その魂が絶えず絶えずみ歌ふて居る、

光果

○

花野過ぎて泣きに行く我の橋のあり

坪谷

明治四十三年九月八日夜

光果

ふるもち嵐のあとのしづけさを味ふおとき
二人となりぬ

櫨の實の青くふくらむ河岸通り行きては海の
光をぞ吸ふ

うつすらと夜の灯のあたゝかさうすき衣にし
みて雨ふる

いつかはや豆たわ〳〵とみのりたり灯のなが
れたる畑に立ちぬ

七月の山のゆふべにながれたる青のうれひを
店にながむる

ゆふがはの蕾ふくらむくらがりにものゝしめ
りのうらなつかしさ

日に青み日にふくらめる櫨の實を見つゝ男の
眼はしづむなゞ

毛深なる膝をかゝゑて七月の店の曇りにしは
らくむかふ

なぐさまぬ心いだいてかへり來ぬ桑の新芽の
日をわびて萌ゆ

七月の城下はづれのくわばたけ新芽のうへに
夕曇りする

少年と夜語りをしてかへるさを自轉車のゴム
のなつかしう鳴る

くらがりにものあさりしてふと壁の夜のぬく
らみにゆきあひにけり

牛乳吸へばあまさの唇にのこる朝うすわたゝ
かき雨ふりいでぬ

店をいで畑をのがれ青桐の高きによれば野の
悲しまる

のがれ來てひとり悲しむ男の眼いかに沈まむ
まの悲しき眼

なかはぞの町の空なる雨あかりあるは來るや
と女を待ちぬ

黄いろなるらむぷの油壺の沈泥に朝の光のと
けてゆくかな

雨あとのしめりをふめばうら悲し地のぬくら
みにわが肌を吸ふ

銀線のうちふるふおとくいたましくはげしく
「吾」の悔ひなげく朝

生活になれし疲れのやるせなしうす青み顫ふ
あぢさゐの花

しかと胸あまゆる心だきしめてわひゞきの夜
をうれしがるなり

くまどりて百日紅のむらがれる明るさ宵にう
たゝねをする

暮れなやむ九月の空のはの明き畑の青に涙も
よふす

櫨の實の青みつくして鳴るゆふべはゝろかす
かにふるふかなしさ

さびしさをまもるに疲れ人おみのぬくらみを
ゐて床に入りけり

むしわつき雨のゆふべのなやましうかすかに
肌のたゞよへるかな

我が思ひを愛めば秋晴れんとす

秋晴れの畫布鳥もなきに聲もなきに

山行けば言刺消ゆるに秋晴れん

秋晴れの思ひ出に野を刻み行く

除幕式の秋晴れんかとも仰ぐ雲

坪谷

尻先きの子も行きたさに秋晴れて
秋晴の峰のよな心思ひ寢し
襷にも縫ひ秘めし思ひ秋晴れよ
平沙朝寒う見し何かかけりゐて
坂を喘ぎ登りしが秋の海光り
魂合む風祭るにや行く雲も
殊に性質似し言ひ合へり魂夕
殊に庫裡照る日なりしよ飛ぶ蜻蛉
後れ荷にまた雨ぞとも見る蜻蛉かな

酣を辞し歸る灯に狹霧罩む
山の町の霧に來て漁火の歌が
陣の願霧に矢文のまたざらめ
雲驕り射る思ひ風す霧の主
人送りて言ひ合へる霧に吹かれては
かくて沈む胸沸けと砧打つならひ
雨曰を砧女はらす里に來て
さんざめけば夜晴れの虫の遠に鳴く
出水ありし或る夜の夢の虫更けて

264
365

涙酌まん相約せども虫夜頃
丘の月虫はめば我に悲うす
泊めたさの意も見しが花野見返れば
江の明さ花野吹く風に喪船來て
どよも炊がぬ家並見て花野寒う過ぐ
透し彫りの門見しと花野暮れを來て
倚ればよきに何故思ひ立つや花野風

疊り終

明治四十三年九月十一日印刷
明治四十三年九月十五日發行

實費八錢

愛媛縣東宇和郡卯之町
著作兼發行者　宮瀬八重吉
上甲保一郎

愛媛縣東宇和郡卯之町
印刷所　菊池活版所

愛媛縣東宇和郡卯之町
印刷者　高岡伊之助

愛媛縣東宇和郡卯之町一四二
發行所　蕗社

不許複製

C-25

曇り

宮瀬八重吉
上甲保一郎

国立国会図書館

085883-000-3

特49-122

曇り

宮瀬 光果(八重吉)
上甲 坪谷(保一郎)／著

M43

DBD-0457